68

『啓迪集』の書誌研究

小曽戸　洋[1)]，町　泉寿郎[2)]，天野　陽介[1)]

[1)]北里大学東洋医学総合研究所，[2)]二松学舎大学

曲直瀬道三の代表的著書『啓迪集』全8巻は，天正2年（1574）に正親町天皇の叡覧に供された．この書には同年仲冬初吉の策彦周良の題辞と，同年冬至の道三自序がある．当時，国医書の出版はいまだ行われておらず，『啓迪集』は曲直瀬家中で鈔写，伝承された．その経緯を探ることは，江戸印刷文化開始以前の医学相伝情況を知るうえで重要である．小曽戸はかつて本学会総会（1991）で「現存する『啓迪集』の古鈔本」と題し書誌研究を試たが，その後さらに数々の資料を目睹し，新知見を得るに至った．以下，道三自筆もしくはそれに準ずる門弟手鈔の『啓迪集』について見解を述べる．

〔杏雨書屋新収本〕　昨年，武田科学振興財団が思文閣より購入した巻1・2の残本2冊．表紙は焦茶地の包背装．題辞は策彦自筆（3印あり．紙質は本文と異）．自序は道三自筆（3印あり）．巻1首に「洛下翠竹菴一溪道三編」と署し，巻1本文は道三自筆と認められるが，巻2は異筆．

〔東博亨徳院本〕　曲直瀬亨徳院家の末裔・曲直瀬陽造氏が東京国立博物館に寄託中の揃本8冊．丹表紙．題辞は策彦自筆（杏雨新収本と同印）．自序は道三自筆（杏雨新収本と同印）．巻1首に「日本洛下雖知苦斎道三編」と署す．巻1以下本文の多くは玄朔の筆と思われる．毎巻末に「盍静」「曲直瀬」の2印があるが，後者は初代道三の印ではなかろう．末冊尾奥書に「令授与也足斎寿泉公訖」とある．

〔杏雨書屋貴乾A本〕　従来重要美術品に指定された揃本8冊．東博亨徳院本と同質の丹表紙で，題箋文字も酷似（陽光院誠仁親王の筆という）．題辞は策彦自筆（末尾2印は杏雨新収本と同．紙質は本文と同）．道三自序は欠き，その分白紙のまま．巻首に「日本洛下雖知苦斎道三編」と署す．本文はかつて道三自筆とされてきたが，巻1以下多くは玄朔の筆で，他筆も交えるようである（全冊通じて道三筆は皆無）．

〔三原市立図書館本〕　広島県重要文化財指定品．揃本8冊．表紙は杏雨新収本と同じく焦茶地の包背装．題辞は道三の筆．自序は道三自筆．毎巻首に「察証弁治啓迪集巻之幾／日東洛下翠竹院一谿道三編」と記す2行分の墨色は薄く，道三の自筆．巻1本文は道三の筆ではあるまい．巻8は玄朔の筆と思われる．末冊尾に，天正11年（1583）京都において門下の松林軒（姓は水野，出雲の人）に贈与した旨の自筆奥書がある．

〔東大総合図書館本〕　土井鶚軒旧蔵．揃本8冊．未見であるが，ネット公開された巻1の部分画像からは玄朔の筆跡と見て取れる．目録によると天正10年（1582）の写という．

〔杏雨書屋杏994本〕　服部甫庵旧蔵．揃本8冊．未見であるが，手元にある自序の複写からは道三の自筆と見て取れる．上掲東大本と共に目下調査予定中．

〔静嘉堂文庫本〕　慶長7年（1602）に玄朔と正琳（曲直瀬養安院）が養安院門下の寿斎正哲に与えたもの．揃本8冊．題辞と自序は臨模．巻1に「日本洛下翠竹菴道三編」とある．巻1は玄朔の筆と認められる．他に正琳の筆も交えるか．最終巻末に正哲への授与経緯を示す玄朔・正琳両人の奥書がある．

〔石原明旧蔵本〕　昭和30年代に関西の書肆より入手．揃本8冊．表紙は東博亨徳院本や杏雨貴A本と同類の丹紙．巻2以下の題箋文字も酷似．題辞は策彦自筆かと思われ，件の3印がある．自序は道三によく似るが，末尾に件の2印がなく，他筆かと疑われる．巻首第2行には必ずあるはずの道三名が空白行となっており，本文は道三・玄朔とは異筆．

〔宮内庁書陵部本〕〔内閣文庫本〕　前者は揃，後者は巻3・5・6を欠く．両者とも自序は自筆と思われるが，本文は他筆であろう．前者は天正7年に宜帆道救へ，後者は天正15年に延命院へ授与された旨の自筆奥書がある．

以上10点について知見を述べた．それぞれ筆は酷似し，混交しており，その鑑定はよほど熟練しない限り困難なことを痛感した．